卒論の遠い思い出

中島　悦次

○

生れてから学校生活を終了するまで四半世紀私は殆ど病気にいじめられ通して心ならずも親不孝をした。小学校の頃は大病はしないので遅刻早退はあっても欠席は一年生の時七日間きり。但し病身との事で中学入学前に高等小学校まで一年間やらされた。中学では三分の一は欠席、一年生と四年生の時は、気管支炎と盲腸からの腹膜炎で二年間遅れた。父はよく「道楽をしない息子の薬びんか」と言って笑った。

しかし私は性質が無頓着でまめで而も病気馴れしていたせいか、病いが小康を得ると、すぐ友達や祖母と外出しては活動写真（モダンな呼び名はキネマ）やら、オペラやら、歌舞伎やら、長唄の演奏やら、寄席の落語などを見物に出かけて行って楽しんだ。ありがたい事に、父も母ものんきな所があって、一度も止めることもなく、自由にさせてくれたので、病気を忘れて楽しんだり見聞を広めたりする事ができた。ところが、今日では私が病気無頓着から皆の忠告を無視して病いを押して無理をすると云って、長女は「お父さんはこうこつ（硬骨）の人ね」と笑う。

男では一人っ子であった上に中学に入ってからも病気がちだった私にぐちや叱言めいたことは口にしたことのない両親であったが、日本画家だった父は私が大学に入った翌年（大正十年）の一月に数え年四十八歳で急逝したので、私は病気しながらもどうしても五年間で卒業しなければならない立場に立たされた。卒業期は大正十四年（一九二五）三月である。

卒論の準備にかかったのは大正十二年の夏休みからである。ところが、数え年十九歳から二六歳までの間に六回も盲腸炎をくり返し、丁度大正十二年九月関東大震災の頃には、夏から第六回目（最終回）の盲腸炎を病っていた。その時は前後一年半ほどで家で就床してしまった。しかし痛みはおさまっていたので、読書するには差障りがなかった。

○

中学時代から漠然と日本歴史が好きだったので、国史大系・群書類従・史籍集覧・国書刊行会本・国史叢書・国民文庫・博文館の国文、俳諧、文芸の各叢書の類を父にねだって買って貰ってあったし、神話伝説民話の類に心ひかれて、病臥中にも神話に関する本を書店に註文しては届けて貰った。大震災では家屋は傾いたが、幸にその時には火災は免がれたので、ともかく卒論のまとめに取りかかった。その間に単位試験では、論文（レポート）はどうにか書けても、筆記試験には困った。これも幸に十一歳の時から文字通りのかかりつけの医師が親身に心配してくれて、私は注射を受け、痛み止めのパントポンなどを懐中にして人力車で試験をうけに登・下校したことも何度かあった。そしてどうやら規定の単位数を充した。

当時は、古代天皇家を中心に政治的に統一された記・紀の神話の研究というと、かなり障害があった。天皇は神聖にして冒すべからずとか、明つ御神（生き神様）などと称して中々厳しい時代であった。だから神様の科学的分析研究など以ての外というところで、時

代の風潮に迎合しないと、ともすると「不敬だ」とか「赤だ」とか云われて白い眼で見られがちであった。津田左右吉博士の独自の研究などよい例であった。今日から考えると全く悪夢のような時代であった。その点では、日本人が初めて人権というものの認められた敗戦後、俄かに進展した日本神話の研究と発表討論の自由ぶりは目ざましいばかりである。そんなわけで当時は学校でも所謂神話を科学的に研究する神話学などの講座は全く開かれなかった。これも幸にも、私は、大戦前一回きり設けられなかったった松村武雄先生の比較神話学を楽しく聴講することができた。勿論私は折口信夫先生の自由で新鮮な国文講読・国文学史講義は毎年聴講できた。こんな次第で、神話に関するもの（天照大神の神格についての考察）をテーマにして、手許にある範囲の本をたよりにして床上に腹ばって疲れのあいまを縫ってぽつぽつまとめたのであったが、今の年になっても顔が熱くなるような、恥かしい幼稚な論文であった。有難いことに理解ある折口先生が審査して下さり、どうやらお咎めもなく合格だけはできたようである。当時としては百三十枚ほどの短いもので、卒業後、奨めにより補筆して「中央史壇」に分載した。しかし或る学校で或る卒論が立派な単行本にまでなったと聞いたこともあるが、どんなものでも私の卒論は私にとって謂わば学生時代の忘れられない一モニュメントである。

○

それはともかく、将来必ずしも所謂学問生活に入らないでも、在学中に全心うち込んで研究の楽しみを期間的にでも、自身の努力で味わうことができたら、学生冥利であると思う。皆さんの卒論は学校で一年間保管し、後には自身借り出して手許におくことができる筈である。卒論というと堅苦しくなりがちだが、あまり四角ばらず自由にのびのびと個性の発揮されたのが一番望ましい、と私は思う。

卒業論文を書いた頃

浪本　澤一

わたくしは、一九三〇（昭和五）年に、早稲田大学の文学部国文学専攻科に進み、一九三三（昭和八）年に卒業した。当時の日本は、世界恐慌の波をかぶって、社会的には灰色の時代であったが、大学生活そのものには今もなお郷愁を呼ぶものがあった。私学の在野精神が先生と学生とを心の深いところで契合させていたのである。文科の先生には、文壇人としての経歴の上に、学者としての識見を積んだ、所謂早稲田風の先生が多かった。世に碩学と言われる学者も布衣（ほい）をあまなう在野の人であった。したがって、集まってきている学生も文筆の仕事に志を抱く学生がここでは本流であったように思う。もとよりみんな文壇や操觚界に出たわけではなく、その生き方は多様であったが、上の如き雰囲気が早稲田文科独特のカラーを作り出していたのである。

「早稲田文学」（昭和二年六月号）は、自然主義前後研究号であって、相馬御風が「島村抱月先生伝」を書いている。それに依ると足掛四年にわたる抱月の海外留学は、英吉利における英文学の研究だけでなく、独乙に移ってデッソアの美学講義に出席したり、ミュンヘン、ウインにも赴いて、造型美術、演劇、歌劇等を鑑賞し研究することが最も重なる仕事であったとある。また、一九〇五（明治